

保刈実著

『ラディカル・オーラル・ヒストリー』

——オーストラリア先住民

アボリジニの歴史実践

(御茶の水書房・二〇〇四年・三三二〇円)

阿部 珠理

学術書としては珍しく深い感銘をおぼえた。それは著者がすでにこの世にいないことも若干の関連があるだろう。著者は、この著作脱稿の数日後、メルボルンで三二歳の生涯を閉じた。悪性リンパ腫であった。本書は著者がオーストラリア国立大学に提出した博士論文が原型だが、著作としてまとめる作業は、死を目前にしたホスピスの病床で進められた。だが著者による後書きのなかには、悲愴感のみじんもなく、澄明な諧謔と希望すら漂っているのである。保刈実は、勇氣に満ちた人であったに違いない。死の床にありながら死を怖れず、彼がその研究生活において、もっとも価値をおいた「対話」を自己の病んだ身体とも続けた。保刈にとって身体は「世界を知る

うえで決定的に重要な媒体」であった。保刈は「歴史する (doing history)」ため、その身体を、オーストラリア北部のアボリジニ共同体、グリーンジ・カントリーに運んだ。歴史するとは、彼がグリーンジの歴史家と位置付けるジミーじいさんや部族の長老の昔語り (歴史実践) をともに経験することである。

ケネディ大統領がグリーンジにやってきたり、キャプテン・クックが北部海岸にやってきてアボリジニを撃ち殺したり、ジャック・パンダマラという人物がオーストラリアにやってきた最初の白人であるという彼らの「歴史」は、実証主義が主流の歴史学がとうてい「史実」として受けいれることのできないナラティブである。だが著者は、それらをグリーンジの人々の「真摯な」歴史経験として受け止め、自己の歴史理解との「接続可能性」と「共奏可能性」を模索しようとする。他者のリアリティの重さを引き受けようとする。

このような (荒唐無稽な) 言説を「尊重」という名で掬いあげてきた神話論や記憶論、さらには文化相対主義にたいしても、尊重

と言う名の包摂は、結局のところ巧妙な排除であると指摘する著者は、アメリカ先住民のフィールドワーカーである評者自身に立ち位置の再考を促してくれた。

グリーンジの人々の霊的、呪術的、神的な経験と感受性を、著者は排除することはない。むしろ彼らとスピリチュアルな経験、宗教的な世界観を共有することによって、ジープが沙漠のまん中で動かなくなったのは、カントリーが自分の侵入を欲していないからださえ思うようになる。近代の世俗主義が目指す普遍性へのアンチテーゼであるばかりでなく、人と固有の場と霊性の結びつきが産出する、個別的で多元的な歴史実践への展望がそこにはある。

博士論文を携えてグリーンジに戻った保刈は、人々にそれを語り聞かせる。声を返すこと、まさに responsibility (応答責任) を果たすために。西洋近代に出自を持つ学術的歴史実践と先住民グリーンジの歴史実践を架橋しようとする保刈の真摯な試み、対話への信念と誠実、この書を学術書をこえた人間の学びの物語にしている。

(立教大学教授) ◇保刈実・歴史学者